参加者の行動変化からみた国際小児糖尿病キャンプの効果
国際小児糖尿病キャンプの理念と便益

（分担研究：小児期発症インスリン依存型糖尿病の生活管理に関する研究）

貴田嘉一[1)]、中村慶子[2)]、伊藤卓夫[1)]、戒能幸一[1)]

要約：インスリン依存型糖尿病（IDDM）患者に対する教育の機会として、糖尿病キャンプの有用性は高く評価され、世界各地で行われている。今回我々は、第3回国際小児糖尿病キャンプのパーソナリティーに対する効果をみる目的で、日本から参加した14歳から20歳のIDDM患者に対しキャンプ前後のパーソナリティー尺度の変化と生活状況を調査した。キャンプ終了後に社交性尺度、自己顕示性尺度が高まっており、キャンプの効果が示唆された。また、糖尿病の自己管理、友人関係、社会との関係が改善していた。

見出し語：インスリン依存型糖尿病（IDDM）、国際小児糖尿病キャンプ

【はじめに】糖尿病キャンプはインスリン依存型糖尿病（IDDM）患者の医学的、心理的、社会的問題を解決し、IDDM患者の quality of life を得るための効果的な患者教育の１つとして、各地で行われている。国際小児糖尿病キャンプは1989年より開始され、国際的イベントの参加により、友情、連帯意識の育成、社会への広い視野の育成、人生への積極的姿勢の育成（表1）などの効果が期待されている。今回我々は、第3回国際小児糖尿病キャンプに参加した14歳から20歳の15名のIDDM患者に対しキャンプ前後のパーソナリティー尺度の変化と生活状況を調査し、国際小児糖尿病キャンプの効果を検討した。

【対象および方法】対象は、全国16ケ所のキャンプから推薦され、第３回国際小児糖尿病サマーキャンプに参加した14歳から20歳のIDDM患者23名（男性９名、女性14名）の内、パーソナリティー尺度調査に同意が得られ、指定された期間に回答が得られた15名（男性6名、女性9名）である。これら対象に対し、キャンプ参加前1週間と参加後1週間に Arnord H. Buss のパーソナリティー尺度の中から、積極性や指導性に関連した5項目の尺度、50問を5段階選択のアンケート方式で調査した。尺度の内容は(1)社交性尺度（5問）、(2)シャイネス尺度（9問）、(3)自己顕示性尺度（16問）、(4)指導性尺度（8問）、(5)決断力・イニシアティブ尺度（12問）である。尺度の評価は各尺度毎に点数化し、キャンプ前後の変化をWilcoxonの順位和検定で比較した。また、キャンプ参加後9カ月に、(1)糖尿病の自己管理、(2)学校生活・友人関係、(3)家族との関係、(4)社会との関係について調査を行い、キャンプ参加時点を0とする点数法（±10）で自己評価し、回答のあった18名（男性6名、女性12名）の具体的行動変化とキャンプとの関連性を検討した。

表1　国際小児糖尿病キャンプの意義

(1) 友情、連帯意識の育成
(2) 社会への広い視野の育成
(3) 人生への積極的姿勢の育成
(4) 楽しい休暇（リラクゼーション）
(5) 高度な糖尿病教育

(1) 愛媛大学医学部小児科
(Dept. of Pediatrics, Ehime Univ.)

(2) 愛媛大学医学部看護学科
(Faculty of Health Science, Ehime Univ.)

【結果】

1) パーソナリティー尺度について

パーソナリティー尺度5項目の内、社交性と自己顕示性尺度がキャンプ後に有意に高値を示した（$p<0.01$）。シャイネス尺度はやや低値、指導性尺度および決断力・イニシアティブ尺度はやや高値であったものの、キャンプ前後で有意差は認められなかった（表2）。

2) キャンプ参加後9カ月間の生活調査

キャンプ後の糖尿病の自己管理については、キャンプの影響で血糖コントロールが良くなり、ヘモグロビンA1C値が低下したものが14名（78%）みられた。良くなった理由として、血糖自己測定回数の増加、インスリン注射量の微量調節、低血糖に対する予防など自己管理を積極的に行うようになったことをあげていた。学校生活・友人関係についてはキャンプ前から良好であったものが多かったが、良くなったと答えた者が11名（61%）みられた。友人や先生とよく話をするようになり、友人の数が増加した者が10名、病気のことを学校でオープンにはなせるようになったものが5名みられた。家族関係はキャンプ前から良好であり、変化なしと答えた者が多かった。社会に対する姿勢はキャンプ後に興味が増したと評価した者が14名（78%）で、内9名はキャンプで学んだ諸外国の糖尿病治療の現状から、インスリンが入手できないなどの問題を持つ国の糖尿病治療について、家族や友人と話し合ったりしたことなどをあげていた。また、地域のボランティア活動に参加した者が4名みられた。変化なしと答えた4名中3名は受験勉強中であることを理由にあげていた。

【考案】第3回国際小児糖尿病サマーキャンプでは、International Diabetes Youth Camp Program（代表：貴田嘉一）とハワイのスタッフが中心になり計画運営にあたったが、糖尿病治療の勉強会、運動量の異なる種々の活動、妊娠・出産、飲酒などに関するセミナー、ゲーム、観光など内容の濃いもので、行事はすべて英語で行われた。参加者はグループ活動やスキットでの配役を演じることなどを通じて、社交性や自己顕示性を高めたと考えられる。リーダーシップに関連する指導性尺度、決断力・イニシアティブ尺度はキャンプ前後で差がみられなかった。その原因として、調査が国際キャンプ終了直後であり、地元のキャンプで実際にリーダーシップを発揮する機会がなかったことが考えられる。1年後にパーソナリティー尺度調査を再度行う予定である。

キャンプ9カ月後の生活調査では、糖尿病の自己管理に関して、医師に指示される側から自分で積極的に管理していく方向への変化が見られ、ほとんどの者がキャンプ前に比し良好なコントロールを得ていた。時差や活動の程度によるインスリン量の変更などの体験を通じて血糖自己測定およびインスリン療法について学習したこと、および後述する心理・社会面への良い影響が糖尿病治療に対する積極性を導いたものと考えられる。また、学校などでの交友関係が良くなり、社会に対して積極的な姿勢が認められた。国際糖尿病キャンプという国際的なイベントに参加することにより、広い友情連帯意識が芽ばえることにより安定した心理状態が得られ、社会への広い視野を養うことができ、人生への積極的な姿勢が育成されたと考えられ、国際的な経験の有効性が強く示唆された。

表2　キャンプ前後のパーソナリティー尺度
（対象：15名）

尺度	キャンプ前	キャンプ後	差
社交性	3.64±0.16	3.93±0.15	$p<0.01$
シャイネス	2.51±0.28	2.27±0.22	N.S.
自己顕示	3.38±0.15	3.67±0.19	$p<0.01$
指導性	3.53±0.16	3.69±0.19	N.S.
決断力イニシアティブ	3.17±0.16	3.38±0.14	N.S.

表3　キャンプ9カ月後の生活調査
（対象：18名）

項目	良くなった	変化なし	悪くなった	自己評価
(1)糖尿病自己管理	14名	2名	2名	2.00±0.76
(2)学校生活友人関係	11名	7名	0名	4.11±0.72
(3)家族との関係	2名	16名	0名	1.56±0.60
(4)社会との関係	14名	4名	0名	3.06±0.75

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:インスリン依存型糖尿病(IDDM)患者に対する教育の機会として、糖尿病キャンプの有用性は高く評価され、世界各地で行われている。今回我々は、第3回国際小児糖尿病キャンプのパーソナリティーに対する効果をみる目的で、日本から参加した14歳から20歳の IDDM 患者に対しキャンプ前後のパーソナリティー尺度の変化と生活状況を調査した。キャンプ終了後に社交性尺度、自己顕示性尺度が高まっており、キャンプの効果が示唆された。また、糖尿病の自己管理、友人関係、社会との関係が改善していた。